3　コーディネーターについて

（1）コーディネーター*とは

①コーディネーターの役割

コーディネーターは、学校と地域をつなぐキーパーソンです。コーディネーターの役割は一般的に次のようなものが挙げられます。

○情報収集

地域の情報を収集します

・地域の人材・関係機関・施設等の情報を収集し、整理・管理します。

学校の情報を収集します

・地域連携教員と連携して学校のニーズを収集し、整理・管理します。

実践編P27

○つながりづくり

地域のボランティアを募集します

・学校の依頼を基にボランティアを地域に募集します。

学校にボランティアを紹介します

・学校のニーズに応じたボランティアを学校に紹介します。

ボランティアや教員の関係づくりを行います

・ボランティアと教員、ボランティア同士の関係づくりを行います。

○マネジメント（管理・運営）

連携活動を進めるための計画を作成します 実践編P23

・連携活動に関する各種計画を地域連携教員とともに作成します。

打合せの機会をつくります 実践編P29

・連携活動に先立ちボランティアと教員の打合せの機会等を設定します。

連携活動の充実・改善を行います 実践編P39

・ボランティアの活動状況を把握し、改善を図ります。

ボランティアや教員への研修を実施します 実践編P25

・地域連携教員と協力して研修会を企画・実施します。

○情報発信

ボランティア活動の情報を地域や学校に発信します 実践編P35

・活動の情報を掲示板等により教員や児童・生徒に知らせます。

・活動の状況を学校だより等により保護者や地域の人に伝えます。

＊県としては学校支援と地域での学習活動をコーディネートする「地域教育コーディネーター」として養成しています。

②コーディネーターとなる人

コーディネーターには、どのような人がなっているのでしょうか。図3.1はコーディネーターの属性を調査したものですが、一番多いのが「保護者・元保護者」で62.4％になっています。保護者・元保護者は、その学校をよく知る応援団であり、学校支援ボランティアから発展して、コーディネーターを務める人も多いようです。

また、次いで多くなっているのが、地域をよく知っている「自治会役員等」が19.7％となっています。「学校を核とした地域づくり」の観点からも、地域の人材がコーディネーターを務めることは、学校支援をきっかけとした地域づくりにもつながっていきます。続いて、学校をよく知っている元教員や市町の教育委員会及び公民館の職員等の行政職員がコーディネーターとなっている学校もあります。

実践編P45

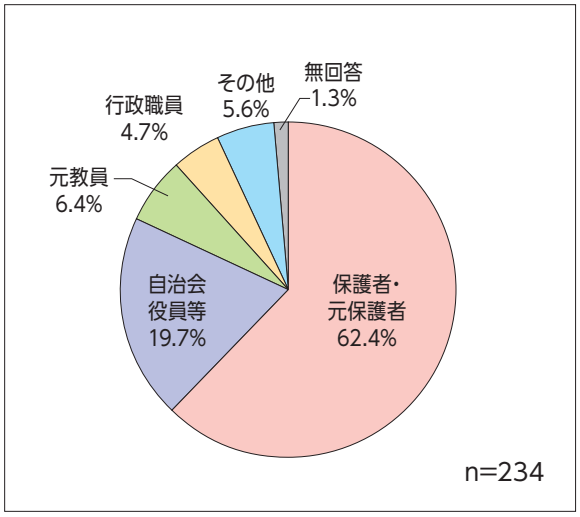

図 3.1　コーディネーターの属性
栃木県総合教育センター調査（平成 29 年）

このような状況から、コーディネーターがいない学校においては、保護者や元保護者に声をかけてみるところから始めてみるのもいいかもしれません。また、複数のコーディネーターをお願いして、多様な人材を見つけていくことも有効であるといわれています。様々な立場の方々に声をかけて、学校支援ボランティアの体制づくりを進めていくことも大切です。

③コーディネーターの設置状況

コーディネーターはどの学校にも設置されているわけではありません。図3.2は学校種別のコーディネーターの有無を調べたものですが、小学校で53.2％、中学校で51.4％と、小・中学校では約半数の学校にコーディネーターがいる状況です。一方、高等学校では15.2％、特別支援学校では21.4％と小・中学校と比べると低い設置状況になっています。高等学校では、ボランティアとして学校に来ていただくというよりも、生徒が地域に出て行くという場面が多く、活動ごとに関係機関等とつながっていくことが多い状況です。得意なフィールドを持つ保護者や行政機関等にコーディネーターをお願いすることにより、連携活動の効率化とともに活動の幅も広がっていくことが期待できます。

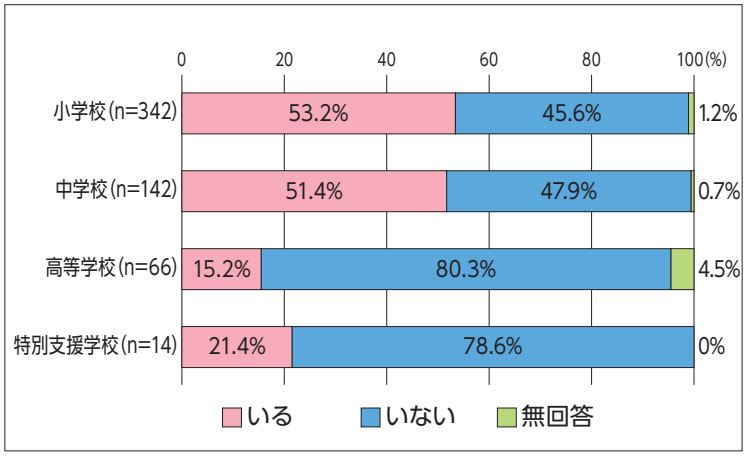

図 3.2　コーディネーターの有無
栃木県総合教育センター調査（平成 28 年）

（2）コーディネーターとの連携による効果

①ボランティア人材の発掘

地域の人に授業を支援してもらいたいと思っても、ボランティアを探すことを考えると面倒になってしまうことがあります。コーディネーターは、そんな時に力強い相談相手になってくれます。教職員が「できるかな？」と感じることも、コーディネーターに相談すると、活動に適した人材を見つけてくれたり、効果的な活動を提案してくれたりします。その結果、子どもたちの学習に広がりや深まりを持たせることができるようになります。

地域は人が人を連れてきてくれます。コーディネーター同士のつながりで多様な人材が発掘されます。人材の発掘には時間も要することから、いつどの単元でどのような支援が何人くらい必要なのかをコーディネーターに伝えておくことが大切です。

②ボランティア活動のマネジメント

「ボランティアをお願いできる人が見つかれば、後は活動していただくだけ」というわけにはいきません。日程調整や打合せから当日の活動、活動の評価まで、連携活動の管理・運営つまり「マネジメント」が必要です。これを、教員が授業を行いながら実施するのは非常に大変なことです。コーディネーターは連携活動におけるマネジメントをしてくれます。

コーディネーターが行うマネジメントの例

○連携活動の計画づくり
- 地域連携教員がまとめた学校支援年間計画を受け取る。
- コーディネーターはボランティアを集めて「連絡会議」を開く。
- 連絡会議でボランティアに予定を伝え、大まかな日程調整を行う。

○連携活動充実のための助言
- 活動する教科等の目標や活動の目的を把握して、ボランティアに伝える。
- 授業支援に出たときの児童・生徒の様子で気になったことを教員に伝える。

○ボランティアの活動支援
- ボランティア室の整備や運営等を行い、ボランティアを支援する。
- ボランティアの活動上の悩み等に対して相談や助言を行う。
- 突然の時間変更や病気等によるボランティアの欠席に対応する。

○連携活動の評価
- ボランティア、教員等と「反省会議」を実施し、連携活動を振り返る。
- 反省から出た課題に対応して改善策を検討し、次回の活動に反映させる。

3　コーディネーターについて

③情報の収集・発信

○活動記録の蓄積

ボランティアの支援による連携活動の学習プログラムや活動の成果は貴重な財産です。地域連携教員と連携して「地域連携実践シート」等として活動の状況を記録したり、活動計画書の反省欄等に記入したりするなど、記録を蓄積し、今後の連携活動に生かしていきます。

実践編P37

○地域情報の収集

コーディネーターは、地域住民や他校のコーディネーター等、「地域のキーパーソン」とのネットワークを持っています。そのネットワークを生かして、コーディネーターは地域の教育資源（人的・物的）の情報を収集してくれます。

○学校情報の地域への発信

学校で何が行われているのか、ボランティアがどのように活動しているか。そして、学校がどんなことを必要としているかを地域に伝えていくことで、地域住民による学校支援の輪が広がります。コーディネーターは、地域の回覧板のニュースや、地域での集まり等の中で、様々な学校情報を地域に発信し、「私にもできることがあったら声をかけてください」という人たちを増やしてくれます。

実践編P35

④学校を核とした地域づくりへの支援

学校は保護者たちにとっても地域住民にとっても学び合いの場です。子どもは大人から、大人は子どもから、互いに多くのことを学び合っています。現在、地域コミュニティの希薄化が指摘されていますが、子どもの活動を支援するために、積極的に協力する大人が増えています。学校支援に集まった大人たちが、学校支援だけでなく、活動を通して得られたネットワークを基に、「新たな地域での学び」や「新たな地域での活動」につながるよう、人と人、人と物を結び付けていくのがコーディネーターです。

このように、コーディネーターは地域づくりの視点も持っていますので、これからの学校と地域が目指す、「学校を核とした地域づくり」にボランティア活動をつなげていくことが期待されます。

実践編P45

学校を核とした地域づくりの例

那須町立高久小学校では、第６学年の「総合的な学習の時間」において、地域の歴史や伝統芸能等を調べていく中で、地元の「本郷八木節」の存在が浮かび上がった。早速、地域コーディネーターに学校側の要望を伝え、活動休止状態であった「本郷八木節保存会」との交流が生まれた。定期的に実技指導等を受ける時間も作って、学習発表会での児童と保存会との共演が実現した。その間、学校での指導に関わる保存会の参加メンバーも増え、活動休止状態だった会の活動が一気に活気づいた。この取組が高久地区公民館に伝わり、「芸能なんでも自慢大会」への参加するなど、「本郷八木節」を多くの地域住民に披露することができた。児童の笑顔が、共演の成功を物語っていた。

（３）コーディネーターの探し方（学校独自で探したい場合）

①探す（出会う）ための情報源

学校にコーディネーターがいない場合は、学校の状況に応じて情報源を頼りに探していく、または地域の様々な方と出会う必要があります。コーディネーターを見つけるための情報源として、また出会う方々として、次のような例が挙げられます。

○学校関係（保護者、同窓会、学校評議員、退職教員　等）
○地域関係（自治会、子ども会・育成会、社会教育関係団体、社会福祉協議会　等）
○ボランティア関係（活動中のボランティア、近隣校のコーディネーター　等）
○行政関係（市町教育委員会生涯学習主管課、公民館、教育事務所ふれあい学習課等）

②校種によるコーディネーターの傾向

コーディネーターは、その属性等により「得意なフィールド」を持っています。人によっては多くのフィールドを持っている方々もいらっしゃいますが、一般的に得意なフィールドは次のように整理することができるでしょう。

学校周辺の地域に詳しい人	保護者・元保護者、自治会関係者、近隣の住民　等
地域の団体等に詳しい人	商店会の関係者、公民館職員、地域団体の役員　等
広域的なつながりがある人	行政職員、商工会議所関係者、高等教育機関関係者、企業関係者　等

これらの状況と、「発達段階による地域の捉え方（Ｐ６）」を考え併せると、校種に応じて得意なフィールドを持つコーディネーターを複数設置していくことが、効率的な連携活動の推進につながっていきます。

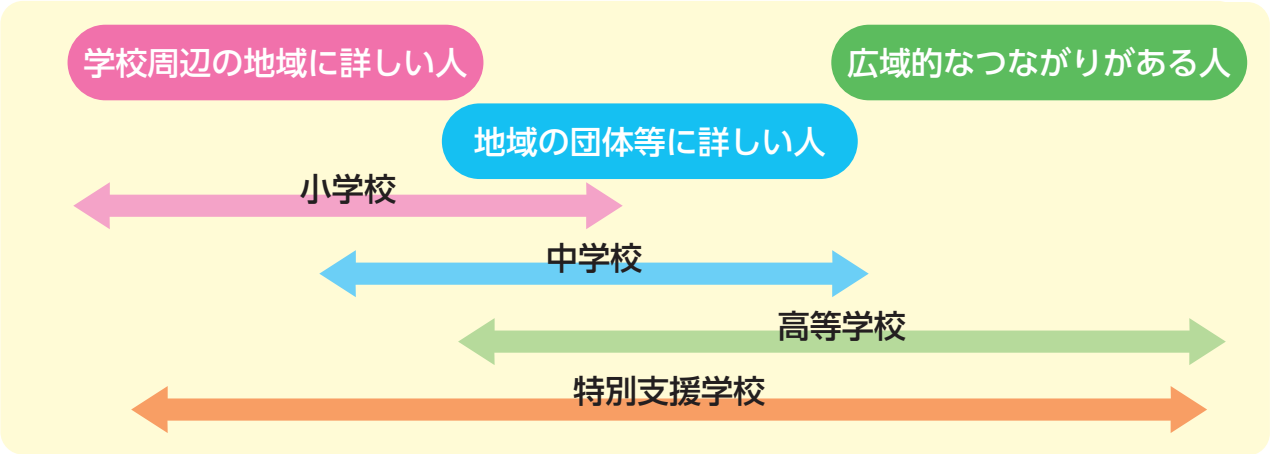

図 3.3　校種に応じたコーディネーターの傾向（目安）

3　コーディネーターについて

小学生段階では学校支援ボランティアが学校に来て活動したり、地域の教育資源を教材として使用したりする場面が多いことから、学校周辺の地域に詳しい人がコーディネーターとなる場合が多いようです。中学生段階では、ボランティア活動をはじめ、生徒が地域に出て活動をする場面が多いことから、公民館職員や地域の商店会等、小学生段階と比べて広域的に地域情報やつながりを持っている方にも、コーディネーターとして活躍してもらうことが望まれます。また、高校生段階においては「地域課題解決」や「キャリア教育」等、生徒がこれまでの学びを生かしていく活動が多くなってくることから、行政職員や高等教育機関等、広域的・専門的につながりを持っている方が望まれます。

ただし、コーディネーターはアンテナを高くして、様々な機会を自ら求めていく人も多いことから、地域の方であっても大きなネットワークを構築している方もいらっしゃいます。コーディネーターの皆さんと情報交換しながらコーディネートの輪を広げていきましょう。

③設置の手順（例）

1　設置方針の決定
管理職をはじめ関係職員によりコーディネーターの設置に関する方針を決定し、全教職員の理解と合意を得ます。

⇩

2　情報収集
まずは、活動中のボランティアや保護者、同窓会等、学校周辺の地域に詳しい方々に声をかけ状況を聞きます。

なかなか候補者が見つからない場合は、市町教育委員会生涯学習主管課や教育事務所ふれあい学習課に相談し情報を得ます！！連絡先は（Ｐ47参照）

⇩

3　設置の検討
引き受けてくれそうな方に、学校の教育方針の説明や学校見学等をしてもらい学校を知ってもらいます。
また、候補者について関係職員に報告・検討します。

⇩

4　候補者への依頼
教職員の合意を得た後、候補者にコーディネーターとして活躍していただけるよう依頼します。

⇩

5　体制づくり
担当教員を明確にするとともに、ボランティア室の設置や掲示板の整備等、校内の受入れ体制を整えます。

⇩

6　教員等への周知
コーディネーターを職員等に紹介し、教員と顔が分かる関係づくりを行います。